

私、老人ホームやで。

～ Aさんの獲得～

愛全園には九十名の方が生活されています。
今回は、職員と利用者Aさんを通して「認知症」について考えたいと思います。

藤原さんがAさんと出会ったのは一年半前のことです。実は藤原さん、平成九年から足羽ワークセンターで長年勤務され、平成二十年四月に異動となって愛全園にきました。障害者福祉から老人福祉への転身に戸惑いの毎日だったと言います。愛全園には九十名の方々が入所されていますが、中でもAさんの印象は特に強かったそうです。それは次のようなエピソードを聞いたからです。

【ケーキを食べ終えて】

A 老人ホーム預けたけど…息子のことや話してる間に老人ホーム持つて行ったんや。
職 ……
A ケーキをもらったんや。老人ホームももらったんや。だいたいつけないの。一体、誰が持つて行ったんや。
職 お皿？かなあ…いつべん探してみます。
A そんなにたいしたもんでもないけど。

※A：Aさん 職：職員

愛全園の仕事も一通り覚えたら、Aさんの担当となりました。Aさんにとって「老人ホーム」には、何か特別な意味や思い入れのようなものがあるのだろうか？藤原さんは疑問を抱きながら情報収集を開始しました。すると「老人ホーム」にまつわるエピソードはたくさん存在しました。



【洗面所にて】

A 私の老人ホーム短くしての（髪を触っている）。
職 ひよつとして髪を短くしたいんですか？
A だいたい伸びたでの。

読者の皆様は、これら二つのやりとりを見て、どう感じるでしょうか？

藤原さんは、Aさんのご家族に話を伺いました。ご家族は、元気だった頃の生活、性格や仕事ぶり、介護が必要になり始めた頃からのお話を、時間をかけて丁寧に話してくれました。入所される直前、認知症が進行していった時期には『あんなにしっかりとっていたのに…すべてが壊れていってしまいうようだ』と涙ながらに語ってくれたそうです。

ご家族の切実な胸の内を知り、藤原さんの心は大きく揺れました。これまで足羽福祉会で働いてきた自分の姿勢を問い直し、あらためてAさんのことを考えてみよう。

藤原さんの考察

認知症にかかわらず、高齢になればうまくできないことが、どうしても増えてきます。そのことを平然と、静かに、ありのままに受け入れることができているのでしょうか？

藤原さんは、自分にはできそうもないことに思えました。伝えたい思いは今ここにある。イメージは浮かんでるのですが、でも、それを表す言葉が出てこない。それでも伝えたいとしたら…みなさんはどうされますか？あきらめてしまえますか？

【外を眺めながら】

職 ここは見晴らしがいいですね。
A そうや。あれが老人ホーム、和田中やの。あれも老人ホーム。
職 私◎◎さんの知り合いやでの。
A Aさんは何でもこ存じなんですな。
職 そうや。
A 私、老人ホームやで（笑顔）。



Aさんの会話の流れは自然です。逆に「老人ホーム」の言葉だけが不自然です。口をついて出てこない言葉すべてを「老人ホーム」と言っているのでは、と考えました。

ご家族の話によれば、Aさんはたくさんの人に土地を貸し、土地の管理ばかりか借りた方のお世話もされていたそうです。ですから、最後の「私、老人ホームやで」は「私、地主やで」と理解できました。他はマンシヨンやビルの実在する建物です。

認知症と言うと、どんな物事がわからなくなるイメージが強いかも知れません。ですが、Aさんはその中でもAさんならではの方法で、話す行為を獲得されていると藤原さんは思うのです。それは紛れもなくAさん、そしてご家族が教えてくれたことでした。

同じものに光をあてても、角度によって、生じるシルエットは大きく変わります。幾つもの光で本当の姿を捉えたいものです。そこにはきつと、その人の生き方、そのものの光があると信じます。